

# えひめ発! いじめ防止のためのアクション

## ～県内一斉ライブ授業「えひめいじめSTOP! デイ」～

### 1. はじめに

「オンライン会議やったら、県内すべての小・中学校の子どもたちが、同時にいじめについて考えられるんじゃないか。」

そんなつづやきが、まさか、現実のものになろうとは…。

令和2年8月。コロナ禍で、子どもたちが一堂に参集することができなくなり、「いじめSTOP!愛顔(えがお)のえひめフォーラム」の中止が決まった。3年間の地域フォーラムの集大成として計画してきたが、ゴールの見えないコロナ禍にあっては、次の年に、「えひめフォーラム」を開催できる保証はない。アフターコロナを見据えたとき、児童生徒のいじめ防止に向けた主体的な取組みを推進するアクションを新たに生み出さなければ…。

これは、全国でも類を見ない、県内すべての小6・中1の児童生徒、約23,000人をオンラインでつなぎ、いじめ問題について考えるライブ配信授業「えひめいじめSTOP! デイ」が実現するまでの記録である。

### 2. これまでの取組

いじめ問題と言えば、責任追及や事後対応が注目されがちであるが、いじめに苦しむ子どもや保護者の切実な声を聞かされたとき、「傷付く前に救う」という大切な視点を忘れてはならないと痛感する。いじめのいちばん近くにいる子どもたち自らが考え、行動する活動を県教育委員会が支援することは、いじめを防ぐ取組を県全体で共有し、いじめの未然防止を大きく前進させるものと考え、平成25年度に、「いじめSTOP!愛顔(えがお)の子どもサポート事業」を立ち上げた。

第1期は、平成25年度から2年間、小中学生を対象とした子ども会議を開いた。県内すべての市町から代表の児童

生徒が参集し、実践発表や県内各地の同世代の仲間との意見交換を通して、いじめをなくすリーダーとしての自覚を高め、自校のいじめ防止の取組に生かすことをねらいとした。その後、県の取組をモデルに、各市町でも子ども会議が開かれるようになった。

第2期は、平成27年度から3年間、小中学生に加え高校生も参加する「子どもフォーラム」を開催した。高校生がいじめ防止啓発劇を上演したり、いじめSTOP!ソングを制作して県内に発信したりするなど、高校生の主体的な活動を支援するとともに、実践発表や班別協議を通じて、学校種を越えた県全体の取組を推進した。

第3期は、平成30年度から3年間、大学生や地域の子ども見守り隊の方など、対象をさらに拡大するとともに、県内3か所で、「地域フォーラム」を開催した。パネルディスカッションでの課題の掘り起こし、分科会での協議、全体会での共有と、社会総ぐるみの取組に発展させ、子どもたちの取組を地域全体でサポートする体制整備に重点を置いた。

そして、第4期。

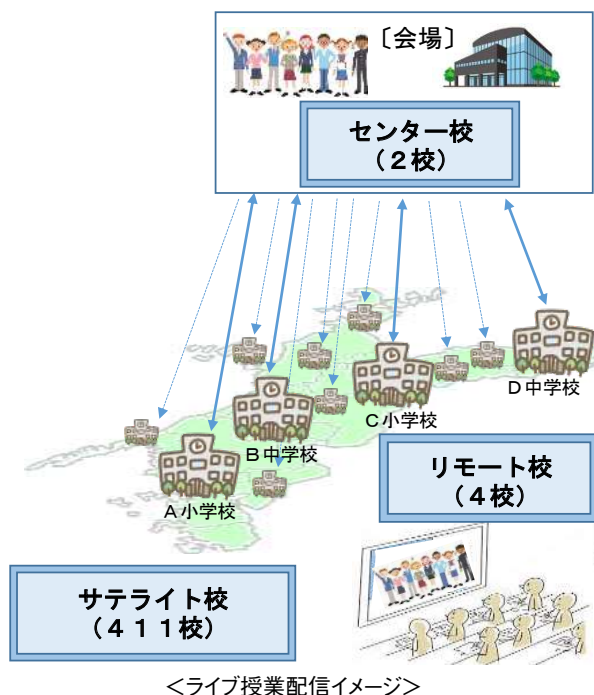
継続的な取組の成果として、各市町での子ども会議が定着し、いじめの起こりにくい機運が高まってきたところに、コロナ禍となった。今こそ、これまでの取組の成果が試されるとともに、これまで以上に、いじめの被害者にも加害者にも傍観者にもならない、自分のことと同じように周りの人を大切に思うことのできる児童生徒を育成する取組を力強く推進しなくてはならない。

そこで、参集しなくても繋がることのできるオンラインのメリットを生かしたライブ配信授業に大きく舵を切った。そして、対象を一気に増やして、県内すべての小6と中1とした。

こうして、約23,000人が、同時にいじめ問題について考える日「えひめいじめSTOP! デイ」が誕生した。

### 3. 民間放送局とタッグを組んで

コロナ禍でGIGAスクール構想が前倒しされ、インターネット環境の整備が本格的に進みつつあった。ただ、オンラインで県内の417の小・中学校を繋ぎ、生放送で授業を配信するためには、インターネット環境を使った安定した通信の確保や効果的な映像配信をいかに実現するかが大きな課題であった。そこで、民間の放送局とタッグを組んで、スムーズな接続を実現することとした。



さらに、放送メディアの強みを生かし、教育×放送メディアのコラボによって、これまでにない新しい取組にしたいと考え、誰もが知っている著名人をゲストに迎えたり、司会には、日頃テレビで活躍しているアナウンサーを起用したりするなど、児童生徒の興味・関心を引き付ける仕掛けを盛り込んだ。

ライブ授業は、YouTubeで限定配信することとし、事前の配信テストを2回実施した。1回目の時には、受信できない学校がいくつも出たが、2回目のテストを行うことで、本番は、大きなトラブルなくライブ授業をスタートすることができた。

### 4. ライブ授業「えひめいじめSTOP! デイ」

#### (1) 見つめる (事前のテーマ設定)

いじめは、被害者と加害者だけの問題ではなく、観衆や傍観者も大きく関与している。この「暗黙の支持」がある状況ではいじめの解決は難しく、エスカレートや再発の危険性も避けられない。本県が行う、子どもたち自らが考える活動は、傍観者が減り、被害者に寄り添う理解者が多数生まれることで、「いじめが起こりにくい学校の実現」を目指している。

具体的には、子どもたちの生の声をライブ授業に反映させるため、中心となるセンター校を小・中各1校ずつ選定し、取材しながら何度もミーティングを重ねた。そして、子どもたちの生の声を集めていき、その中から、いじめを見たときの行動や相談の必要性など4つのテーマを設定した。



＜センター校でのミーティング＞

#### (2) 知る・深める (同世代の多様な考えに触れて)



小学6年生  
中学1年生  
約2万4千人の  
一斉授業

※ 他学年を含めた総参加人数

＜令和3年度のポスター＞

ライブ授業は、90分。まず、センター校とリモート校(小・中各2校ずつ)が4つのテーマについて意見交換を行い、

その後、サテライト校がそれぞれの学級で「自分たちがこれから頑張りたいこと」について話し合い活動を行うこととした。最後には、ゲストやアドバイザーの方から、メッセージをいただき、参加しているすべての児童生徒が、いじめの未然防止に向けて一体感を感じられるよう魅力的な展開を工夫した。

14:00	開会
	ゲスト紹介+センター校・リモート校紹介 (5分間)
14:05	センター校2校で実施した「愛顔つながるシート」内容Q.1～Q.4を「VTR&リーダー生発言」で発表→リモート校4校も発表 (50分間)
	<p>Q.1 いじめられている人を見つけたとき、ひとりですること</p> <p>Q.2 いじめられている人を見つけたとき、二人以上ですること</p> <p>Q.3 いじめについて、大人(先生・親)にしてほしいこと</p> <p>Q.4 どんな人になら、いじめを相談できる?</p> <p>※Q.1～Q.4をひとつずつ取り上げ、まずセンター校2校から発表 そのあと、リモート校4校がそれぞれ発表 ※ゲストと助言者から、随時アドバイス・意見</p>
14:55	当日の司会者の説明を聞いて、それぞれの学校で話し合い サテライト校(センター校・リモート校含む) (20分間) ※休憩含む
	【テーマ】自分たちがこれから頑張りたいこと
15:15	ライブ授業を通して考えた「自分たちがこれから頑張りたいこと」を発表 ※各校代表1名(センター校2名+リモート校4名…各約1分間)
	ゲストと助言者から、えひめの子どもたちへのエール～エンディング (15分間)
15:30	閉会

<ライブ授業 タイムテーブル>



<ステージの様子>

ライブ授業当日、子どもたちは、真剣に考えながら、自分の言葉で思いを伝え合った。また、ゲストやアドバイザーによるタイムリーな助言が入ることで、本音が引き出され、さらに活発な意見交換となった。さらに、民間放送局とタッグを組んだことにより、スムーズな進行や効果的な演出、

安定したネット環境を通じて、より心に訴えかける授業が実現でき、今、いじめに悩む子どもたちに、リアルタイムで、同世代の多くの仲間の声を届けることができた。

サテライト校の児童生徒の意見は、後日 Web アンケートで吸い上げ、県内すべての小中学校へ配信したデジタル新聞「えひめ愛顔の子ども新聞」で共有した。



<子どもたちの意見交換>

### 【子どもたちの声】

#### Q1. 「いじめに対して、一人ですること」



- ・注意すると自分もいじめられるかもと不安。
- ・仲間を集める。
- ・一人で解決しようとせず、相談する。



アドバイス  
[アドバイザー：愛媛県教育カウンセラー協会代表西原勝則氏]

一人で止める、注意することができない自分をダメだと思わなくていいよ。できることからスタートすればいいよ。

#### Q2. 「二人以上ですること」



- ・仲間がいると、注意などもしやすい。
- ・一緒に解決策を考える。
- ・いじめられている子をグループに入れる。



アドバイス

仲間と行動すれば教室が変わってくる。その雰囲気がいじめている子が「はっ」と気付けば、いじめはSTOPしやすいんじゃないかな。



### Q3. 「大人（先生・親）にしてほしいこと」



- ・いじめが起こらない環境をつくってほしい。
- ・話を聞いてほしいけど、質問攻めにしないで。
- ・最初は自分たちに任せてほしい。



親・先生・子どもが一緒に話し合いができる環境があればいいね。思っていることを言葉にして声に出すのは大事。

アドバイス  
[スペシャルゲスト：小島よしお氏]

### Q4. 「どんな人になら、いじめを相談できる?」



- ・家族や先生、やさしくて頼れる人。
- ・親には心配をかけたくないので相談しにくい。
- ・立場が同じ人。自分の意見を言ってくれる人。



心配かけたくないという気持ちも分かるけど、親や先生たちは一緒に考えたいんだよ。

アドバイス

### 【参加した保護者の声】

- ・日頃からコミュニケーションをとるように気を付けているつもりだったが、子どもたちの話を聞き、改めてその大切さを感じた。
- ・親の意見だけでなく、子どもの思いをしっかりと受け止め、信じること、子どもの味方であること、安心できる存在であることが大切だと感じた。
- ・子どもがいじめについてまっすぐに向き合って、話したり、考えたりすること自体が、いじめへの意識を変える機会だと感じた。

### (3) 広げる（事後活動）

#### ① ドキュメンタリー番組の放送

ライブ授業当日の様子やいじめと向き合う親子の姿などを30分のドキュメンタリー番組にまとめ、放映した。



<ドキュメンタリー番組案内チラシ>

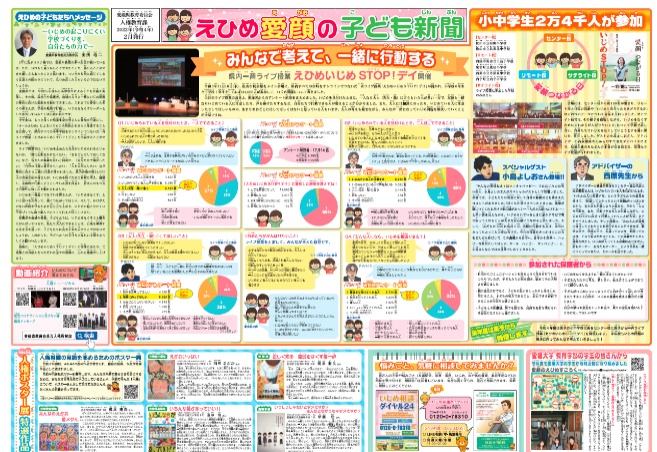
#### ② えひめ愛顔の子ども新聞（デジタル版）発行

ライブ授業の内容や教育長メッセージ、いじめをテーマにした人権ミュージカルの紹介、人権ポスターの特選作品等を掲載したデジタル新聞を作成し、県内すべての小中高等学校等の児童生徒に配信した。

作成に当たっては、愛媛大学教育学部の学生の皆さんの協力を得て、ライブ授業の取材活動と併せ、いじめや人権について楽しみながら学べるオリジナル教材づくりにも取り組んでいただいた。

★えひめ愛顔の子ども新聞はコチラ↓

[ehime-c.esnet.ed.jp/jinken/index.html](http://ehime-c.esnet.ed.jp/jinken/index.html)



<えひめ愛顔の子ども新聞>

### 5. 約1万8千人が回答したWebアンケートから見てきたこと（成果と課題）

後日、ライブ授業に参加した児童生徒に Web アンケートを行ったところ、約1万8千人から返信があり、97%が参考になったと回答した。また、学校対象のアンケートでも、

99%が参考になったとの結果が得られた。感想には、

- ・ いじめはダメだと分かっている、こんなに深く考えたことはなかった
- ・ これからは、私が助けたい
- ・ ためらわず相談したい
- ・ いじめられている人を見たら自分はどうすればいいか考えることができた
- ・ STOP!デイに参加して、いじめはどんな事があってもだめだという気持ちが強くなった
- ・ 今まで、関わったらいじめに巻き込まれると思って注意も何もしなかったけど、次からは大人に相談しようと思った

など、傍観的立場からの脱却姿勢が見られた。

また、「他の学校の友達と似た意見だった」「『助け合う学校』という発言で自分の学校はできているかなと考えさせられた」「自分と違う意見を聞いて考えが深まった」など、STOP!デイにみんなで参加し、いじめについてみんなで考え、いじめをなくそうとしている仲間同士のつながりをみんなで共有することもできた。

さらに、3か月後の追調査では、「子ども同士のトラブルが減少した」と約2割の学校が回答した。

これらの結果から、いじめの未然防止に向けて今後さらに期待ができる取組であると分析している。

今後は、対象としている小6・中1だけに留まらず、学校や地域全体でいじめ問題について考える「えひめいじめSTOP!デイ」に高めていくために、工夫改善していきたい。

さらに、STOP!デイの開催に向け、各学校でのいじめ問題の解消に向けた取組を繋いでいくことにも力を入れたと考えている。

いじめのいちばん近くにいる子どもたちが、「いじめをなくす」という思いを共有して、強くつながってほしい。そして、かけがえのない仲間を守るために自ら立ち上がり、いじめの起こりにくい学校づくりに取り組んでほしい。

今後も、誰もが愛顔で安心して学校生活を送ることができ、誰にとっても毎日が「愛顔つながる日」になることを願って、えひめ独自のいじめ防止のためのアクションを力強く推進していきたい。



<令和4年度のポスター>

## 6. 毎日が「愛顔つながる日」になることを願って

2年目の今年は、「寄り添う。それは、大きなチカラ。」をキャッチコピーに、誰もいじめの傍観者にならないことを目指して、ライブ授業の準備を始めている。今年が目玉は、「演劇ワークショップ」の手法を取り入れた課題の掘り起こしや、ラジオ番組とのコラボレーション、ライブ授業の中で参加児童生徒の意見を即座に反映させるなど、内容は盛りだくさんの予定だ。

また、児童生徒一人ひとりが、問題意識をもって主体的に参加できるよう、事前にアンケートを実施したり、ナビゲーターから呼び掛けを行ったりするなど、ライブ授業への期待感や参加意識を高めたい。